

## 日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における 接続表現に関する比較研究

### A Contrastive Study on Conjunctive Expressions in the Written Opinions of Japanese Native Speakers and Chinese Learners of Japanese

範 海 翔

FAN Hai Xiang

#### Abstract

Firstly, this paper analyzes the features of conjunctive expressions in the written opinions of Japanese native speakers and Chinese intermediate learners of Japanese. It was found Chinese intermediate learners of Japanese used conjunctive expressions more than Japanese native speakers. In particular, Japanese native speakers used conjunctive expressions which demonstrated inverse relationships, conversion relationships and complementary relationships more than their Chinese counterparts whereas the Chinese intermediate learners of Japanese used *jumunsetsugata*, *tenkagata* and appositives more than their Japanese counterparts. However, both used comparisons with equal frequency. Secondly, this paper considers the reasons for the distribution between the usage of conjunctive expressions between both groups. This paper analyzed and classified the causes behind the heavy usage of conjunctive expressions among Chinese intermediate learners of Japanese: 1) They use it even if they shouldn't; 2) They don't leave it out even if they can; 3) They heavily use conjunctive expressions because of their context development style.

**Keywords** : 日本語母語話者、中国人日本語学習者、意見文、接続表現

#### 0. はじめに

日本語学習者によって書かれた作文は、文が正しく書かれているし、文章全体の意味も通じるのだが、何となく違和感を感じることもある。その原因はいろいろがあるが、その

1つは文章接続表現<sup>1)</sup>の使用にあると考えられる。接続表現は、文と文、文段と文段の接続機能を担うだけでなく、これらの言語単位間の論理関係を明示するためにも使われている。つまり、接続表現は、書き手が自分の表現したい内容を分かりやすく整理し、文の論理的関連性を読者に伝えるために使われるものである。接続表現は、このような精神的活動を反映する機能も持つため、その選択や使う頻度や入れる場所<sup>2)</sup>などが難しいという特徴を持っている。学習者の接続表現の使用の実態について、浅井(2002)は上級レベルの日本語学習者の作文に用いられる接続節を中心に調査した。また浅井(2003)は同上級レベルの学習者の作文に用いられる接続詞について調査した。両調査で得た学習者の文章における接続節または接続詞の使用特徴に基き、浅井(2002・2003)は学習者の接続表現の使用特徴によって形成された文章論理展開の問題点を明らかにした。しかし、もっとも指導が必要な中級レベルについては触れていないのである。日本語学習途上にある中級学習者は、上級学習者より、接続表現が過剰か過少に使われ、そのことが文章の論理展開に影響を及ぼす可能性があると考えられる。本稿では、文章の構造の視点から日本語母語話者と比較しながら、中国人中級日本語学習者の文章における接続表現の使用の特徴を考察する。接続表現の使用における中国人中級日本語学習者と日本語母語話者の相違点と共通点を明らかにしたい。さらに相違の原因を探りたい。

## 1. 先行研究

### 1-1 市川(1978)の「文の接続」と接続表現の類型

市川(1978)では、文の接続が主に接続表現<sup>3)</sup>と指示語の2つでなされ、文脈の展開に重要な役割を持っているとされている。市川(1978)の接続表現は、接続詞、接続詞的機能を持つ語句、接続助詞、接続助詞的機能を持つ語句のことで、文と文、または節と節のさまざまな論理関係を示すものである。文の接続には、接続表現以外に指示語や同一語句、文末表現なども用いられるが、接続表現が文章内部の論理関係を端的に表す文の接続であると指摘されている。市川(1978)は、文と文がどのような論理関係でつながれているかを「接続関係」とよび、8類に分類している。表1は市川の分類とそれぞれに含まれる接続表現を整理したものである

さらに以上の類型の文脈形成上の特色に基き、市川(1978: 93)はこの8つの類型の接続表現を3つのグループにまとめて考察している。順接型・逆接型は2つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係を表すため、グループ1の「論理的結合関係」にまとめられている。そして添加型・対比型・転換型のような2つの事柄を別々に述べる関係はグループ2「多角的連続関係」とよばれる。最後に1つの事柄に関して拡充して述べる同列型・補足型・連鎖型はグループ3の「拡充的合成関係」としてまとめられている。

表1 市川(1978)の文の接続型の8類型

順接型	全文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型 だから・ですから・それで・すると・かくて・こうして・それには など
逆接型	前文の内容に反する内容を後文の述べ型 しかし・けれども・だが・でも・が・ところが・それが など
添加型	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型 そして・ついで・それから・そのうえ・そのとき・そこへ など
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型 いっぽう・逆に・それとも・または・あるいは など
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型 ところで、さて、では、ともあれ、それはそうと など
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型 すなわち・つまり・要するに・せめて・とりわけ など
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に重ねて述べる型 なぜなら・というのは・だって・なお・ちなみに など
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型(普通接続表現は用いられない)

### 1-2 接続表現の省略可能性

接続表現の省略について、市川(1978)は文の接続関係は常に明示されるわけではなく、文と文の間に接続表現を入れなくてもよい場合があると指摘している。接続表現には省略できる補助的用法のものと必ず必要な必須的用法のものがあり、「また」、「そして」、「一方」、「それとも」、「すなわち」などは補助的用法としての傾向が強く、「ところが」、「しかし」、「そのため」、「だから」などは必須的用法としての傾向が強いと指摘されている。市川(1978)は、接続表現を多く用いると文章が論理的に整えられるが、その反面、描写性が薄れて説明調になったり、簡潔さが失ったりする場合もあると指摘している。また、佐久間(1992)は、「各接続類型の省略率の平均値を見ると、『逆接型』『転換型』が両データとも比較的 low、省略されにくい用法だと考えている。これに対して、『対比型』『同列型』『添加型』『補足型』の順で省略率が高くなっている」とまとめている。さらに馬場(2006)は、市川や佐久間の研究を踏まえ、接続表現の省略に影響する文脈的要因を検討している。

### 1-3 日本語学習者の接続表現に関する研究

学習者の作文における接続表現に関する研究は多くなされている。しかも視点もさまざまである。接続表現の習得の研究は奥山(2001)、接続表現の誤用を引き起こす諸要因の究

明は佐藤(1992)などがある。浅井(2002)は、文の構造(接続助詞を中心)の視点から上級学習者の接続表現の使用特徴を調査している。文章構造との関係で学習者の接続表現を研究するものとして浅井(2003)、田代(2007)がある。

浅井(2003)は市川(1978)の文の接続関係による接続表現の類型法に基き、日本語母語話者と上級学習者の作文における接続表現を分類し、両者の作文における接続表現の特徴をまとめた。浅井(2003)の分析・考察の結果は、母語話者と学習者の間における接続表現の使用の相違と考えられる点がいくつかあることを示している。まず両者の接続表現の使用量については、学習者の接続表現の多用が目立っている。そして、接続表現別に見ると、「また」は母語話者、学習者ともに多く用いているが、「そして」、「つまり」は学習者の方が多く使用している。さらに、学習者では「そうすれば」、「そうしたら」などの条件-帰結を示す接続表現と、「だから」、「けれども」、「でも」などの話し言葉が多く使用されている。最後、学習者の作文では「だから」、「そして」、「しかし」などの比較的早い段階で学習する接続表現の使用頻度が高いという現象に対して、浅井(2003: 95)は、「学習の早い段階で導入された項目は話し言葉、書き言葉とも用いることができるため、学習者が使いやすと考えられる。それに対し、母語話者の使用が多かった『さらに』、『だが』などの接続表現は使用範囲に制限があり、学習者にとって誤用しやすく、あまり用いられないと考えられる」と述べている。以上のように浅井(2003)は母語話者と上級日本語学習者の作文に接続表現の特徴をまとめている。

田代(2007)は、論理展開に関わる接続節と接続詞に注目し、中級レベルの学習者と母語話者の意見文を比較分析し、学習者の文章に使われる接続表現の量の特徴を考察した。文と文の接続を示す接続詞<sup>4</sup>の使用量について、田代(2007)は接続詞使用量の平均については学習者のほうが母語話者より多く、*t*検定を行った結果に有意差が得たと報告している。さらに田代(2007)は市川(1978)の類型法に基いて、類型別に接続詞の使用を考察している。逆接型の接続詞の使用は、母語話者の場合もっとも使用頻度が高いのに対して、学習者の場合には3番目であった。順接型の接続詞の使用頻度は、学習者の場合1位であり、母語話者の場合は4番目であった。同列(「つまり」等)と補足(「なぜなら」等)の接続詞は学習者の方が母語話者より少ないことも見られた。以上の量的結果に基き、田代(2007)は学習者は順接の接続詞や恒常的条件の条件節を用いて根拠を示す場合が多く、順接的展開が中心で逆接的展開が少ないため、主張の制限、反駁などの論理展開が日本語母語話者ほど多くないことも明らかにしている。田代(2007: 142)は「作文・文法指導への提言としては、意見を述べる際にその理由のみならず主張の反証、制限、例外への反駁・対策を加えるという展開も必要とされるため、それらの表現を文脈上で自在に運用できるようにすることが求められよう」と述べ、学習者と日本語母語話者の文と文をつなぐ型によって形成された論理展開の相違について整理している。

以上の日本語母語話者と中・上級の日本語学習者の作文における接続表現に関する研究は、市川(1978)の「文の接続」論を用いて、両者の接続表現を類別に考察したものである。浅井(2003)、田代(2007)はともに、母語話者より学習者が接続表現を多く用いる現象を取り上げたが、その現象の引き起こす要因についての分析はまだ足りたいと思われる。本稿は、先行研究と同じように市川(1978)の「文の接続」理論を用い、中国人中級日本語学習者と日本語母語話者の意見文における接続表現を類別に考察し、さらに接続表現の省略可能性や文脈展開の様式と関連づけて、学習者による接続表現の多用の原因を検討したい。

## 2. 調査データ

本稿では国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベースver.2正式公開版」に収録された中国人日本語学習者（以降CNとする）と、日本語母語話者（以降JPとする）による日本語作文「たばこについてのあなたの意見」（喫煙規制に賛成か反対か）を本稿では資料とした。作文数はCNが43編、JPが44編である。作文の長さが800字程度という指示のもとで書かれたものである。

## 3. 結果

今回の調査対象である44編のJPの意見文は合計715文からなり、43編のCNの意見文は合計790文からなっている。接続表現の使用は、JPは176例であり、CNは225例である。JPとCNそれぞれにおける接続表現と総文数の割合を計算すると、JPの接続表現は24.6%を占めていて、CNの場合は28.4%であった。JPよりCNのほうが接続表現の使用量が多いことが分かった。具体的データは次の表2のとおりである。

表2 調査概況

対象	作文数	全文数	接続表現数	総文数との割合
JP	44	715	176	24.6%
CN	43	790	225	28.4%

詳しく両者の接続表現の使用を分析するため、調査で得た接続表現は市川(1978)の類型方に基いて分類した。結果は表3のようである。接続表現の使用の最上3位は、JPは添加型(28.4%)、逆接型(27.3%)、同列型(14.2%)の順であるのに対して、CNは順接型(28.4%)、添加型(27.6%)、逆接型(21.3%)の順であった。一方、もっとも少なかった型は、JPは転換型(2.3%)で、学習者は転換型(1.3%)と補足型(1.3%)であった。

表3 接続表現の類型別数

接続表現の類型	接続表現使用量 (JP)	接続表現使用量 (CN)
順接型	24 (13.6%)	64 (28.4%)
逆接型	48 (27.3%)	48 (21.3%)
添加型	50 (28.4%)	62 (27.6%)
対比型	8 (4.5%)	8 (3.6%)
転換型	4 (2.3%)	3 (1.3%)
同列型	25 (14.2%)	37 (16.4%)
補足型	17 (9.7%)	3 (1.3%)
合計	176 (100.0%)	225 (100.0%)

次の(1)–(3)はJPが多用する添加型・逆接型・同列型の接続表現の使用例である。例(1)–(3)で用いられた「また」「しかし」「つまり」はそれぞれの類型においてもっとも多く用いられている接続表現である。(下線は筆者による)

- (1) テレビ等の影響が必ずあるとは言い切れないけれど、喫煙の姿に、あこがれを持たせるのはテレビ等の情報メディアだろう。また、喫煙者の喫煙権利を主張する意見もあるが、喫煙は周囲の人にも影響を及ぼす。(JP) (添加)
- (2) たばこを吸ってはいけないという権利を勝ちとっているのである。しかし、喫煙者にとっては喫煙の権利を奪われているのである。(JP) (逆接)
- (3) どちらかの権利を主張すればもう一方は必ず権利を奪われるということを考えなければならぬ。つまり、非喫煙者の規制の主張は喫煙者の権利を奪いとっているのではないか。

(JP) (同列)

次の(4)–(6)はCNが多用する順接型・添加型・逆接型の使用例である。例(4)–(6)に出てきた「だから」「また」「しかし」はCNのそれぞれの類型においてもっとも多く用いられている接続表現である。

- (4) 世界で毎年たばこを吸ったら死んだ人が何百万人ぐらいいる。だから、現在、各国ではたばこが禁止する規則を作った。(CN) (順接) (本稿におけるCNの例文は筆者による加筆していない。)
- (5) 始めて日本に来た時、日本人の喫煙者の数に驚かれた。また、日本人女性がたばこに対する平気さも不思議に思った。(CN) (添加)
- (6) 確かに、誰にもたばこを吸う権利がある。しかし、公共の場所では、たばこを吸うと、

まわりの人に迷惑をかけるから、やめるべきと思う。(CN) (逆接)

以上、JPとCNの意見文の接続表現の基本概況と具体的用例について見た。総文数に対する接続表現の使用割合はJPよりCNの方が少し多いのが分かった。また、JPは添加型の接続表現を多く用いるのに対し、CNは順接型を多用している。そして転換型の接続表現の使用は両者とも少ない傾向が見られた。JPとCNの接続表現の使用上の特徴ならびに要因について、次の章で接続表現別に分析・考察しよう。

#### 4. 接続表現別の使用状況と考察

接続表現による文脈形成上の特色に基き、市川(1978: 93)は前節の表3に挙げたの7類の接続表現を「論理的結合関係」、「多角的連接関係」、「拡充的合成関係」の3つのグループにまとめている。(第2節の先行研究を参照)。本稿は市川(1978: 93)の分類法に従い、それら7種の接続表現を3つのグループに分けて、JPとCNの接続表現の使用状況を詳しく考察しようとするものである。

##### 4-1 論理的結合関係

論理的結合関係には順接型と逆接型の接続表現がある。JPとCNの意見文に用いられる順接型と逆接型の接続表現に関する集計結果は表4(次頁)のようである。順接型の接続表現の使用は、JPが24例(13.6%)であるのに対して、CNはずっと多くの64例(28.4%)を用いている。逆接型はJPが48例(27.3%)とCNは48例(21.3%)である。CNよりJPの方がやや多いである。

文章中の逆接型の接続表現について、浜田(1995)では、「PしかしQ」はある事実の別の面を見せることによって、相手に反論したり、話題を転換したりするとされている。次の例(7)、(8)のように「しかし」を用いることにより、JPは自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えたりして、議論を精緻に行い、自分の意見をより強くしている。また、「しかし」の使用を通して、自然に新しい話題に変えていくのである。

- (7) 私はタバコ嫌いですから、規制には基本的に賛成です。しかし、ただ単に禁止一点貼りでは、その規制は功を奏すことはないでしょう。人に自由な決定を希求する本能が備わっている限り、それをくすぐる形での規制、とりもおさず喫煙者の本心から出た自主的な規制でなければならないのです。時間と論議と行使が必要でしょう。(JP) (逆接)
- (8) シンガポールでは、道端にごみを捨てたら罰金が課せられると聞きます。私はこの事を知った時は、「とても良い制度だ。日本もこうすれば道はもっと綺麗になるのに…」と思いました。しかし今になってよく考えてみると、規制されなければ国民が道を汚さ

ぬ努力をしないという事実は、とても悲しく残念なことに違いないのです。(JP) (逆接)

一方、CNは順接型の接続表現を多く用いている。(9)はCNの順接型の接続表現を使う例である。順接型の接続表現が2回出てきている。

- (9) こう言えば、たばこの問題はべつの時間・場合と人によって、違う解決方法があるべきだ。だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう。社会、あるいは、コマーシャルとか、周りの人とか、みんな手を出さないで積極的吸わせること、また、禁止すること、両方ともしないべきだと思う。だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面に「これが体に悪い」だけと書いた方がいい。(CN) (順接)

#### 4-1-1 順接型接続表現の特徴

順接型接続表現の出現内訳を見ると(次頁の表4)、JPは「だから」をもっとも多く用いている。次は「ですから」、「そのため」の順である。一方、CNはJPと同じように「だから」をもっとも多く使っている。その次も「ですから」である。順接型接続表現の選択において、JPとCNは同じく「だから」と「ですから」を多用する傾向があることが分かった。

一方、順接型の接続表現の使用上の相違点として、JPよりCNの方が「こうして」、「こうすると」、「こうしたら」など指示語を含む接続表現を多く用いている。(10)、(11)はCNの意見文の例である。

- (10) 私の意見は「たばこ禁止」ではなく、「たばこを吸う区」を設けることである。こうすると、人々は皆普通に生活することができる。(CN) (順接)
- (11) 公共の場で、個人の行為は必ず他の人に悪い影響がないようにすべきである。こうして、たばこを吸いたい人は他の人のために、全然吸わないようになる。(CN) (順接)

(10)、(11)はまず前文で意見や主張を述べ、後文で「こうすると」、「こうして」の接続表現を用いて、自分の意見と主張がもたらす効果を導き出すのである。このような「こうして」、「こうすると」、「こうしたら」の使用はJPの意見文にはあまり見られない。また、CNは「したがって」のようなかたい順接関係を表す接続表現を用いているが、JPは「それゆえに」、「だからこそ」のような少しやわらかい接続表現を使っている。



表4 順接型と逆接型の使用状況

接続表現 (順接)	JP	CN	接続表現 (逆接)	JP	CN
だから	10 (41.6%)	32 (50.0%)	しかし	40 (83.3%)	17 (35.4%)
ですから	5 (20.1%)	12 (18.6%)	それなのに	3 (6.25%)	—
そのため	4 (16.7%)	—	でも	2 (4.16%)	25 (52.1%)
だからこそ	2 (8.30%)	—	だからといって	2 (4.16%)	—
それで	1 (4.17%)	9 (14.1%)	ところが	1 (2.04%)	4 (8.3%)
こうして	1 (4.17%)	2 (3.13%)	けれども	—	1 (2.1%)
それゆえに	1 (4.17%)	—	それにしても	—	1 (2.1%)
したがって	—	3 (4.69%)	合計	48	48
こうすると	—	1 (15.6%)	「—」は使用していないことを表す。( ) の中の数字は接続表現の使用例数とその接 続表現の全使用数の割合である。以降も同 じである。		
こうしたら	—	1 (15.6%)			
すると	—	1 (15.6%)			
そうして	—	1 (15.6%)			
そうしたら	—	1 (15.6%)			
そこで	—	1 (15.6%)			
合計	24	64			

## 4-1-2 逆接型接続表現の特徴

逆接型接続表現の内JPは「しかし」をもっとも多く用いている。CNは「でも」がもっとも多く、その次に「しかし」が多く使われている。「しかし」も「でも」も代表的な逆接型の接続表現である。逆接的意味関係の伝達に使いやすい表現だと考えられる。しかし、書面によく使われている「しかし」と比べて、「でも」は話し言葉で、とくに論理的文章では避けられる表現である。このような文体差・文章ジャンルの差も、学習者に注意する必要があると思われる。

- (12) たとえは、あなたはたばこを吸いたい、もちろんあなたはたばこを吸う権利があります。でもとなりいる人はたばこを吸いたくない。(CN) (逆接)
- (13) タバコをやめることについて、いろいろな提案があるのに、人によって差があるから、実施することは難しいです。でも、人間はタバコを吸う権利があるからと言っても、タバコが本当に害をもたらすので、公衆の場所でやめた方がいいと思います。(CN) (逆接)

また逆接接続表現は、JPの方が「だからといって」、「それなのに」のような意味と用法の上で少し複雑な接続表現を使用しているが、このような表現はCNには見られなかつ

た。これは中級レベルの学習者はこのような複雑な接続表現をまだ使いこなしていないことを示している。

#### 4-2 多角的接続関係

多角的接続関係には添加型と対比型と転換型がある。調査結果は表5のとおりである(次頁)。添加型の接続表現はJPが合計50例(28.4%)を使用しているのに対し、CNがやや多くの62例(27.6%)を使用している。対比型の接続表現はJPとCNとともに8例である。転換型の接続表現は両者とも出現例が少なく、JPは4例(2.3%)で、CNは3例(1.3%)である。多角的接続関係における接続表現の使用は、量的から見れば、JPとCNの間に大きな差が見られなかったが、同じ類型における接続表現の選択はJPとCNの間にずれが見られた。

##### 4-2-1 添加型の接続表現の使用状況

次頁の表5のように添加型の接続表現では、JPは「また」と「そして」の使用がもっとも多く、それぞれ23例(46.0%)と12例(24.0%)用いている。CNはJPと同じく「また」と「そして」の使用がもっとも多く、19例(30.6%)と10例(16.1%)である。

「次に」、「さらに」、「最後に」<sup>5)</sup>のような前後順序を表す接続表現はJPよりCNの方が多く使用していて、JPの使用例は見られなかった。(14)のようにCNは「最後」を用いて論理展開順序を示した。一方、CNと比べJPはこのような場合に「あと」のような表現を用いている。

なお、(14)に対する中国語版(15)を挙げておく。(14)、(15)の比較してから分かるように、中国語母語の影響が多少あると考えられる。日本語の「次に」、「さらに(更に)」、「最後に」のような接続表現は中国語の中に形態も機能も類似した表現がある。今回利用したコーパスにある例(14)に対応する中国語の例(15)は、「最后」(最後)の使用が見られる。

(14) 最後、たばこに浸っている人々は、自分の健康を考えなくても、他人にめいわくをかけるないようにしないですか。(CN) (添加)

(15) 最后 (最後), 沉浸于香烟里的人们, 即使不为自己的健康考虑, 难道不应不为他人带来不便吗? 这也是一项义务吧。(例14の中国語版)

表5 添加型・対比型・転換型の使用状況

接続表現 (添加)	JP	CN	接続表現 (対比型)	JP	CN
また	23 (46.0%)	19 (30.6%)	ましてや	3 (37.5%)	—
そして	12 (24.0%)	10 (16.1%)	むしろ	2 (25.0%)	—
それに	5 (10.0%)	8 (12.9%)	一方	1 (12.5%)	5 (62.5%)
しかも	3 (6.0%)	3 (4.83%)	逆に	1 (12.5%)	1 (1.25%)
その上	2 (4.0%)	4 (6.45%)	それに対し	1 (12.5%)	—
次に	1 (2.0%)	6 (9.67%)	他方	—	1 (12.5%)
第二に	1 (2.0%)	1 (1.61%)	または	—	1 (12.5%)
あと	1 (2.0%)	—	合計	8	8
そのとき	1 (2.0%)	—	接続表現 (転換型)	JP	CN
二つめに	1 (2.0%)	—	では	2 (50.0%)	—
さらに	—	4 (6.45%)	そもそも	1 (25.0%)	—
最後に	—	3 (4.83%)	それならば	1 (25.0%)	—
と同時に	—	2 (3.23%)	ところで	—	2 (66.7%)
それから	—	1 (1.61%)	さて	—	1 (33.3%)
もう一つ	—	1 (1.61%)	合計	4	3
合計	50	62			

## 4-2-2 対比型と転換型の接続表現の使用特徴

対比型と転換型の接続表現はJPとCN両者ともに使用数が少ないが、対比型と転換型で使われる接続表現の種類にはJPとCNの間に大きな相違が見られた。JPの意見文に現れた種類の対比・転換の接続表現はCNの意見文に用いられていない。表5のとおり、対比型において、JPは「ましてや」、「むしろ」の使用が多いのに対して、CNにはその使用が見られなかった。逆に、CNは「一方」の使用がもっとも多かったが、JPは1例しかなかった。転換型の接続表現についても同じことが言える。JPは主に「では」、「そもそも」、「それならば」を使っているのに対し、CNは「ところで」と「さて」を使って転換関係を表している。

この違いについては、4-1-2で述べたような学習者のレベルの問題であることが考えられる。「一方」と「ところで」は比較的早い段階で学習できる接続表現であるが、「ましてや」、「むしろ」、「そもそも」、「それならば」は中級レベルの学習者にとってまだ使いこなせていない接続表現であると考えられる。

### 4-3 拡充的合成関係

拡充的合成関係には同列型と補足型の接続表現がある。表6に示したとおり、同列型において、CNはJPより接続表現の使用例が多く、CNは37例（16.4%）であるのに対しJPは25例（14.2%）である。逆に補足型においては、JPの接続表現の使用はCNよりずっと多く、JPは17例（9.7%）であり、CNは僅かの3例（1.3%）だけである（本稿の表3を参照）。拡充的合成関係において、JPは同列型接続表現と補足型接続表現をほぼ均等に使用しているのに対して、CNはもっぱら同列型の接続表現だけを使う傾向があると言える。

表6 同列型と補足型の接続表現の使用状況

接続表現（同列）	JP	CN	接続表現（補足）	JP	CN
つまり	8 (32.0%)	4 (10.8%)	なぜなら	11 (64.7%)	-
たとえば	5 (20.0%)	16 (43.2%)	ただ	3 (17.6%)	-
まず	5 (20.0%)	7 (18.9%)	なぜかという	1 (5.88%)	2 (66.7%)
第一に	2 (8.0%)	1 (2.70%)	ただし	1 (5.88%)	-
現に	2 (8.0%)	-	と申しますのも	1 (5.88%)	-
とくに	1 (4.0%)	5 (13.5%)	とういうのは	-	1 (33.3%)
要するに	1 (4.0%)	1 (2.70%)	合計	17	3
一つめに	1 (4.0%)	-			
せめて	-	2 (5.40%)			
とりわけ	-	1 (2.70%)			
合計	25	37			

#### 4-3-1 同列型と補足型の接続表現の使用特徴

同列型の接続表現について、JPは「つまり」の使用例が多く、CNは「たとえば」の使用例が多いことが分かった。また補足型については、JPの意見文に「なぜなら」が多く使われているのに対して、CNの意見文には「なぜなら」がまったく使われていない。この点に関して、JPとCNの文脈展開の方法に違いがあると思われる。

市川(1978)は「たとえば」が「例証や例示」などによく使われる接続表現であると述べている。「たとえば」の多用は「例証や例示」が多いことを示している。「例証や例示」を挙げることによって論点の正当性が証明されることになり、読み手に納得させやすい文章にすることができる。たとえば次の(16)の例は、CNが「回りの人々の健康に害も与えます」という論点を打ち出した後に、すぐその論点の正しさを支える証拠を挙げていることを示している。

- (16) みんなご存じのようにタバコを吸うことは自分自身に害を与えるだけではなく、重要なことは回りの人々の健康に害も与えます。たとえば込んでいる電車の中で空気がもう新鮮ではなくて、その時、ひとりの乗客はタバコを吸うと、みんな一緒に吸うことになりました。(CN) (同列)

一方、「つまり」は「詳述・要約・換言」によく使われる接続表現であると、市川(1978)は述べている。甲田(1996)では「つまり」や「なぜなら」などの接続表現は注釈・補充の接続表現とされ、「前の表現を受けてそのレベルを変更し、一段階上の(あるいは別の)把握・解釈として捉え直し、後件として関連づけるもの」とされている。次の(17)、(18)のように、JPは「つまり」や「なぜなら」を使い、論点に対して注釈や補充をし、相手に自分の主張を納得させるようとする文脈展開の様式が好むようである。

- (17) 主流煙が体に悪いということは当たり前ですが、副流煙も体に悪影響を及ぼします。つまり、たばこを吸わない人でも、吸っている人の傍にいれば、徐々に影響を受け、不健康になっていくのです。(JP) (同列)

- (18) 私自身は喫煙に反対派です。なぜなら喫煙の及ぼす影響は多大なものであるからです。(JP) (補足)

以上JPと中級CNの意見文における接続表現の使用特徴を見てきた。今回の調査は浅井(2003)で行った上級日本語学習者と日本語母語話者の接続表現の調査結果と異なっている点もあれば、一致する点もある。日本語母語話者より、学習者のほうが接続表現を多用している点について、本稿で調べた中級学習者の場合と浅井(2003)で調べた上級学習者の場合とで共通する特徴である。次章では中級日本語学習者の接続表現多用の要因について検討したいと思う。

## 5. 中国人中級日本語学習者が接続表現を多用する要因

今回の調査では、CNはJPより文と文のつながりに接続表現を多く使用し、文の論理関係を明示していることが分かった。CNが接続表現を多用する現象は、黒岩(1994)、浅井(2002)、田代(2007)などの研究でも指摘されているが、その理由については、「母語話者では接続表現を使わない場合でも学習者は接続表現を使うためだと思われる」(浅井2003: 94)との指摘にとどまる。しかし、母語話者が「接続表現を使わない場合」が具体的にどんな場合かは触れていない。文の論理関係を明示するときに接続表現を使う、明示しないときに接続表現を使わないとしたら、それぞれの場合が一体どんな場合かを明示しなければならない。接続表現の使用・不使用の原理が簡単ではないが、本稿では、次の(19)のよう

に3つに分けて、学習者が接続表現を多用する要因を考えたいと思う。

(19) 要因1——使ってはいけない場合にってしまう

要因2——省略してもいい場合に省略しない

要因3——文脈展開の様式特徴から生じる多用

### 5-1 原因1——使ってはいけない場合にってしまう

使ってはいけない場合とは、使うと不自然・非文法的な接続になってしまう場合である。こういう場合に、母語話者は無論使わない。しかし学習者は接続表現をってしまうことがある。たとえば次の(20)のような例である。

(20) 当たり前、だれにもたばこを吸う権利があるはずです。とりわけ現代の個人の権利を重視する社会では、人々は自分の権利を持っているはずです。だから、一方、別の人はたばこを吸われない権利もあります。(CN)

「だから」は順接関係を表す接続表現で、「一方」は対比関係を表す接続表現である。(20)は文の一つの場所に「だから」と「一方」が同時に使われている。前の文脈からみれば、「たばこを吸う人の権利」から「たばこを吸わない人の権利」への展開は、対比の関係が強く、「一方」を使うほうが適切である。「だから」の使用は余計になってしまい、不自然な文になる。このように、使ってはいけない場合に学習者が接続表現を使ってしまう、その結果、接続表現の数が多くなると考えられる。

### 5-2 原因2——省略してもいい場合に省略しない

文章の簡潔性を保つため母語話者は接続表現を省略することがある。学習者は省略してもいい場合に省略しないことがある。

日本語接続表現の省略問題は市川(1978)、佐久間(1992)、馬場(2006)などの先行研究で詳しく述べられている。先行研究の調査結果をまとめると、日本語接続表現の省略率は次の表7のようである。

表7 日本語接続表現の省略率 (%)

接続類型	市川調査	佐久間調査	馬場調査
順接型	45	50	58
逆接型	14	8	23
添加型	61	58	69
対比型	67	71	66
転換型	24	37	29
同列型	57	73	78
補足型	54	65	71

表7に示したとおり、逆接型と転換型の接続表現は省略されにくい、順接型→対比型→添加型→補足型→同列型の順で、省略率が高くなっていく。(21a)、(22a)はJPの意見文から取り出した接続表現省略の例である。

- (21a) 私の身近に愛煙家は居る。父親、先輩、友達や駅のホームでも愛煙家の姿を見ることができる。規制が厳しくなったからといって喫煙者が減ったりすることは無さそうに感じる。(JP)
- (21b) ①私の身近に愛煙家は居る。②(たとえば)、父親、先輩、友達や駅のホームでも愛煙家の姿を見ることができる。③(だから)、規制が厳しくなったからといって喫煙者が減ったりすることは無さそうに感じる。(JP) (①、②、③の番号は筆者によるものである)
- (22a) その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。それはタバコの煙に含まれて発せられるふくりゅう煙という煙の方が害になるからです。(JP)
- (22b) ①その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。②(なぜなら)、それはタバコの煙に含まれて発せられるふくりゅう煙という煙の方が害になるからです。(JP)

例(21a)は、3つの文の間に接続表現が使われていないが、(21b)のような接続表現が省略されていると考えられる。(21a)の①と②の間に同列の接続表現「たとえば」を入れることができ、②と③の間に順接を表す「だから」のような接続表現を入れることができる。例(22a)も、(22b)に示したように①と②の間に「なぜなら」を補うことができる。

このような省略してもいい場合に、次の(23)の例のように学習者が接続表現を省略しない傾向がある。

- (23) ①新聞によると、毎年タバコで死ぬ人が世界の死ぬ人全体に占める割合はだんだん高くなつたそうです。②ですから、タバコを吸えないよう規則を作るべきだと思います。③みんなご存じのようにタバコを吸うことは自分自身に害を与えるだけでなく、重要なことは回りの人々の健康に害も与えます。④たとえば、込んでいる電車の中で空気がもう新鮮ではなくて、その時、ひとりの乗客はタバコを吸うと、みんな一緒に吸うことになりました。⑤その上、医学によって、タバコを吸う人より回りの人のほうが受けた毒害が多いです。⑥また、電車は人々に対して通勤に欠けないことで、毎日毎日乗らなければなりません。⑦それで、人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、汚染された空気を呼吸せざるをえない。⑧それはどんなにひどいことだろうか。(CN)

(23)の例の中で、8の文の7つのつながりに、接続表現は5つも使われている。使われていないのは③と⑧の二箇所だけである。⑤の「その上」と⑥の「また」、⑦の「それで」は省略しても、文章の理解に支障がないと思うが、学習者が省略せずに連続的接続表現を使っている。

### 5-3 原因3——文脈展開の様式の特徴に生じる多用

学習者は学習者なりの文脈展開の様式を持ち、日本語母語話者と違った文脈展開様式から接続表現を使わざるを得ない場合もある。

日本語母語話者の意見文においては、文の最初にまず自分の主張を述べ、続いて自分の主張を支持する論拠を述べ、文の最後にもう一回自分の主張を繰り返す文脈展開の様式をとる傾向がある。文の最後に自分の主張を繰り返すとき、「だから」「そのため」などの論理的関係の順接を表す接続表現を用いる。次の例(24)のようである。

- (24) 喫煙を規制することに私は賛成です。たばこの煙には2種類あって、口から吐かれる煙である主流煙と、たばこに火をつけた状態でたばこから絶えず出ている副流煙があります。主流煙が体に悪いということは当たり前ですが、副流煙も体に悪影響を及ぼします。(…中略…) また、たばこを公共の場所で吸えないというように法律で規制することは、たばこを吸うなど禁止しているわけではないので、マナーを守って吸うことや、たばこが害になるとわかって吸う分には一向に構わないと思います。だから私は喫煙する場所を定めるなどの喫煙を規制することに賛成です。(JP)
- (25) 私は喫煙者に対して何らかの規制は必要だと考えます。これは私がタバコを吸わないからです。私は学校の授業などで、タバコの性質や周りに与える影響を知る度に、何故こんなにも害のあるタバコを人々は吸うのだらうという疑問と、怒りを覚えました。タバコというのは、吸う人よりもむしろ吸わない周りの人々に害が出るというのです。(…



中略…) タバコはお酒と違って何の利点もないのに、やめられないと言うのは、ある意味タバコは麻薬みたいな物だと思います。ですから早いうちにやめさせるべきなのです。そのため、国が作るある程度の規制は仕方ないと思います。そうすることが一番、誰にとっても良い結果になると信じています (JP)。

(24)はまず文章の最初に「喫煙を規制することに私は賛成です」と自分の主張をのべ、そのあと喫煙を規制する理由を論じ、最後に「だから、私は喫煙する場所を定めるなどの喫煙を規制することに賛成です」と順接の接続表現「だから」を用いてもう一度主張を繰り返す。(25)も同じパターンの例である。最初は「私は喫煙者に対して何らかの規制は必要だと考えます」と主張を示す。最後に「そのため、国が作るある程度の規制は仕方ないと思います」と改めて主張を表明する。

中国人中級学習者の場合は、最初から自分の主張を述べずに、いきなり「喫煙」それ自体の長点と欠点を論じ、自分の主張をその間に何箇所かに点在させる文脈展開の様式をとる傾向がある。自分の主張を表明するたびに、順接の接続表現を使う。次の(26)はその例である。

(26) たばこを吸っては、悪いこともあれば、いいこともあるし。このものが体に悪いだと誰でも知っているでしょう。しかし、たばこを吸ってから、頭がよく働けると、いいアイデアを考えて来たこともよくあるのだもん。こう言えば、たばこの問題はべつの時間・場合と人によって、違う解決方法があるべきだ。だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう。社会、あるいは、コマーシャルとか、周りの人とか、みんな手を出さないで積極的に吸わせること、また、禁止すること、両方ともしないべきだと思う。だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面に「これが体に悪い」だけと書いた方がいい。(…中略…) 権利が平等の物だよな。だから、バスやレストランなど公共の場所でたばこを吸えないべきだ。(CN)

(26)は、日本語母語話者と違って、文章の最初に自分の主張を示さずに、「喫煙」について論じ始めている。喫煙の良さと悪さ、喫煙に対して取る措置、喫煙者の権利などを論じている間に、「だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう」、「だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面に『これが体に悪い』だけと書いた方がいい」と自分の主張を示している。また、文章の最後に「だから、バスやレストランなど公共の場所でたばこを吸えないべきだ」と主張を改めて表明する。このように、学習者は「喫煙」ということを分析していくうちに、徐々に自分の主張を示し、そのたびに順接型接続表現「だから」を用いている。主張表明の回数が多いために、

順接型接続表現の使用も多くなると考えられる。つまり、日本語母語話者と違った文脈展開の様式をもっているため、学習者の接続表現、とくに順接型接続表現がより多く使われているのである。

## 7. まとめと今後の課題

本稿は日本語母語話者と中国人中級学習者の意見文における接続表現の使用について考察した。量から見れば、添加型と対比型と、転換型の接続表現の使用は、両者ほぼ同じである。逆接型の接続表現は日本語母語話者のほうがやや高く、同列型は学習者のほうがやや高くなっている。差が大きいのは順接型と補足型である。順接型は、学習者のほうが圧倒に多いのに対して、補足型は母語話者のほうが多い。選択される接続表現の種類から見れば、学習者は話し言葉向けの接続表現のと、「こうして」などのような指示語を含む接続表現の使用が特徴的である。また、中級学習者にとっては学習できていないため使えない種類の接続表現もある。また、学習者による接続表現多用の要因について、接続表現の誤用による多用、省略しないことによる多用、文脈展開の様式の特徴から生じる多用の3つに分析した。

接続表現の問題は文の長さや接続助詞の使用などにもかかわる。とくに中国語に接続助詞がないため、学習者が日本語の接続助詞の機能をどのような方法を使って補うのか、中国語の母語の干渉はどの程度があるのかはさらに検討する必要がある。

## 注

- 1 実際の調査で「たとえば」や「とくに」や「さらに」のような言語単位が接続詞なのか副詞なのかということは、その判断が極めて難しいとされる。(石黒2009を参照)また接続詞という名称を用いると、「それにもかかわらず」や「換言すると」のような接続句が入るかどうか議論の対象になりかねない。そこで、本稿では佐久間(1990, 1992)、石黒(2009)などを参考にし、接続表現という名称を用いることにする。さらに接続表現という場合、複文の接続助詞も含めて考える立場もあるが、本稿では文を超えるレベルで働くもののみを接続表現として調査の対象にする。
- 2 石黒(2004)第10講を参照。
- 3 市川(1978)は「接続語句」という用語を用いている。「接続語句」と「接続表現」の関係は仁田・益岡(2002: 135)によると、「文章・談話における文連鎖の解明には、市川の接続語句よりさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。接続表現には、用言の連用形・節・文・連文・段落などの言語単位による接続機能を有する表現を含める」とされている。つまり、「接続表現」は文接続の機能上「接続語句」と同様なものであるが、それはただ文章・談話の研究に応じて「接続語句」の範囲が拡大されただけなのである。以上の理由で、また本稿の用語の統一性を保つため、接続語句の代わりに接続表現の用語を用いた。ただし本稿での「接続表現」は文と文をつなぐ接続表現に限定している。
- 4 田代(2007)は母語話者と学習者の作文における接続節と接続詞について調査した。

5 石黒 (2009: 77) は「最後に」に「最後」も含むと指摘している。

### 参考文献

- 浅井美恵子 (2002) 「日本語作文における文の構造の分析 - 日本語母語話者と中国語母語の上級日本語母語話者の作文比較」『日本語教育』115、日本語教育学会、pp51-60.
- 浅井美恵子 (2003) 「論説的文章における接続詞について - 日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4、pp.87-98.
- 石黒 圭 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋留学生センター紀要』12、pp.73-87.
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 奥山和子 (2001) 「留学生の日本語習得家庭における接続表現の分析 - 作文・文章表現の観察・比較から - 」『神戸大学留学生センター紀要』7、pp.35-50.
- 黒岩浩美 (1994) 「文章の結束性について - 連関係の分析からみた学習者の問題 - 」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9、pp.73-87.
- 甲田直美 (1996) 「接続詞とメタ言語」『日本語学』10、pp.28-34.
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要』41、pp.9-22.
- 佐藤政光 (1992) 「日本語学学習者の作文における連文レベルの誤用について」『明示大学教養論集』251、pp.173-187
- 田代ひとみ (2007) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、pp.131-144.
- 永野 賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店.
- 浜田麻里 (1995) 「トコロガとシカシ・デモなど - 逆接続詞の談話における機能 - 」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版.
- 馬場俊臣 (2006) 『日本語の文連接表現 - 指示・接続・反復』おうふう出版.